

松尾町金尾城跡

—一般県道成田成東線地方道路交付金埋蔵文化財調査報告書—



平成18年3月

千葉県山武地域整備センター
財團法人 千葉県教育振興財団

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第553集として、平成14年度に一般県道成田成東線緊急地方道路整備事業で実施した松尾町金尾城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

調査地は中世に築かれた金尾城跡の出城であったとの伝承を残していますが、調査地点が台地北西隅の一部であったことから、城跡としての遺構は発見できなかつたものの、地形を整形した痕跡が認められ、中世の遺物が出土するなど、中世の遺跡であることが明らかとなりました。地域の歴史を知る上での一助となれば幸いです。また、刊行に当たり、この報告書が埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として活用されることを願っております。

終わりに調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関、また発掘作業から整理作業まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人千葉県教育振興財団

理事長 佐藤 健太郎

凡　　例

- 1 本書は、千葉県山武地域整備センター（旧千葉県山武土木事務所）による一般県道成田成東線地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
 - 金尾城跡（遺跡コード407-015） 千葉県山武郡松尾町金尾字稻荷鼻102-1ほか
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は千葉県山武地域整備センターの委託を受け、財團法人千葉県教育振興財団（平成17年9月1日付で財団法人千葉県文化財センターから名称変更）が実施した。
委託業務については下記のとおりである。
 - 平成14年度 「緊急地方道路整備委託（埋蔵文化財調査）」 千葉県山武土木事務所
 - 平成17年度 「地方道路交付金公託（埋蔵文化財調査）」 千葉県山武地域整備センター
- 4 発掘調査及び整理作業担当者は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は上席研究員 鳴田浩司が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育府教育振興部文化財課、千葉県山武地域整備センター、松尾町教育委員会はか多くの方々からの御指導・ご協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記の通りである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「成東」(NI-54-19-11-1) 平成17年3月1日発行
 - 第2図 成田都市計画図41 1/2,500 昭和53年測量
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和53年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。また、図面の座標表示は日本測地系である。

本　文　目　次

Iはじめに	
1 調査の経緯と経過	1
2 調査方法	1
3 遺跡の位置と環境	1
II調査成果	
1 遺構	6
2 遺物	6
IIIまとめ	6
報告書抄録	

挿　図　目　次

第1図 金尾城跡と周辺遺跡位置図	2
第2図 遺跡周辺図	5
第3図 調査範囲とトレンチ配図図	7

図　版　目　次

図版1 遺跡周辺航空写真	
図版2 遺跡遠景、調査地点、調査地点から本城方面を望む	
図版3 第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ	
図版4 調査作業、出土遺物	
第1表 周辺関連遺跡一覧	3

I はじめに

1 調査の経緯と経過

千葉県土木部（現県土整備部）は、緊急地方道路整備事業の一環として一般県道成田成東線において道路整備計画を策定したが、当該事業地内に埋蔵文化財が所在することから、その取り扱いについて関係諸機関と協議した。その結果事業の性格上記録保存することとなり、財団法人千葉県文化財センター（現財団法人千葉県教育振興財団）では、千葉県教育委員会の指導のもと、千葉県山武土木事務所（現千葉県山武地域整備センター）と委託契約を交わし平成14年度に発掘調査を実施し、平成17年度に整理・報告書刊行を実施した。

金尾城跡の発掘調査および整理作業の期間及び調査体制は以下のとおりである。

平成14年度

期 間 平成15年1月8日～平成15年1月20日

組 識 東部調査事務所長 折原 繁

担当職員 上席研究員 遠藤 治雄

内 容 発掘作業

上層 70m²/900m²（確認調査）

平成17年度

期 間 平成18年1月4日～平成18年1月31日

組 識 東部調査事務所長 鈴木 定明

担当職員 上席研究員 鳴田 浩司

内 容 整理作業

水洗・注記から報告書執筆・刊行

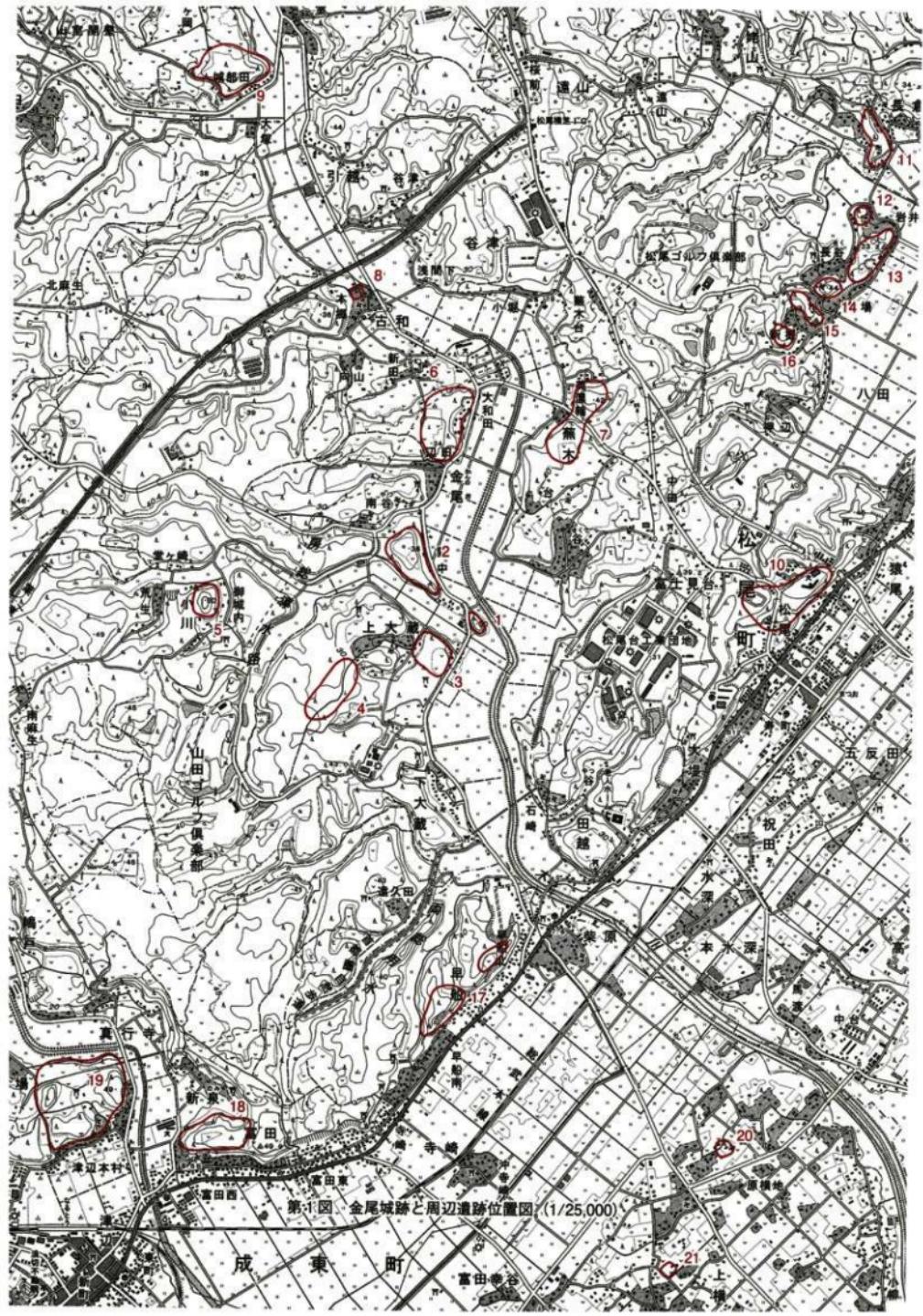
2 調査方法

調査対象とする地点を含む台地先端の島状部の全域に公共座標の網をかぶせ、基準点測量を実施した。基準となる座標A1-00はX = -40,100, Y = 54,780で、20m × 20mを大グリッドとした。そこから東方向には順にA, Bを付し、南方向には順に1, 2, 3, 4の数字を付した。さらに大グリッドを100分割し、2m × 2mの小グリッドを最小単位とした。その後地形に合わせて3か所にトレーニングを設定し確認調査を実施したが、遺構が検出されなかったので本調査には至らず終了した。

3 遺跡の位置と環境（第1図、第1表）

今回調査した金尾城跡の一部は、木戸川を東に望む標高38mあまりの舌状台地先端に位置する。その規模からして本城とは考えられないが、頂上に立つことは360度の視界が開ける。性格的には物見台的なものであったことが容易に察せられる。金尾城の本体は文献1によれば、この台地の基部に位置するとされるが、明瞭な遺構は確認できないようである。

一方、文献1に金尾城跡は金尾字本城にあったとされ、当時は字稻荷鼻に出城を設け、その山腹に稻荷神社を祭ったとされている伝承が紹介されている。この伝承にしたがえば、今回の調査地点はこの出城に相当することになる。この島状の調査地点は、最高点で標高38.6m、幅10m、長さ70mほどの範囲で細長



第1図 金尾城跡と周辺遺跡位置図 (1/25,000)

成 東 町

第1表 周辺関連遺跡一覧

番号	名 称	所 在 地 (上段現在:下段歴史)	立 地 標高・北高	現 況	規 模 (長軸×短軸) m	遺存状況	遺 構	時 代	関連地名
1. 2	金尾城跡	金尾字源郷789他 武射郡金尾村	台地 36・25	山林 荒地・神社	450×220	3/4	郭 虎口	戦国後期	本城 銀上
3	上大藏城跡	上大藏字宿台137他 武射郡上大藏村	台地 20・10	山林 畠・公園	260×200	1/2	郭 空堀 土塁		戸根 東台
4	大藏城跡	下大藏字南郷522他 武射郡下大藏村	台地 30・18	山林	550×160	全城	明確な遺構なし	中世	
5	小川城跡	小川字谷津116他 武射郡小川村	台地 49・35	山林	200×160	全城	郭 空堀	戦国	御城内 登口
6	金尾館跡	金尾 武射郡金尾村	台地 30・20	山林 畠		消滅	明確な遺構なし	中世	新場 番場
7	熊木城跡	熊木字音羽594他 武射郡熊木村	台地 40・30	山林 畠	570×250	3/4	郭 積曲輪 空堀 土塁	戦国	殿台
8	古和頃跡	古和字本郷 武射郡古和村	微高地 12・2	山林 宅地	70×70	3/4	郭 空堀 土塁	中世	竹ノ花
9	山室城跡	山室字城ノ1123他 武射郡山室村	台地 36・23	山林 畠	430×300	3/4	郭 積曲輪 空堀 土塁 土橋 虎口	戦国後期	城台 城ノ腰 物見台 外郭
10	松尾城跡	松尾字桔梗台112他 武射郡松尾村	台地 40・30	山林 宅地・学校	550×300	1/2	郭 土塁	近世	倉屋敷 大手前
11	長倉砦跡	長倉字宿1288他 武射郡長倉村	台地 20・13	山林 寺院	400×100	全城	郭 空堀 土塁 櫓台	戦国	宿
12	八田砦跡Ⅰ	八田字岩井崎1060他 武射郡八田村	台地 30・20	山林 宅地・寺院	100×100	3/4	郭 穂切 土塁	戦国	
13	八田砦跡Ⅱ	八田字表場1170他 武射郡八田村	台地 33・23	山林	420×160	全城	郭 穂曲輪 土塁 櫓台	戦国	
14	八田砦跡Ⅲ	八田字上長谷1202他 武射郡八田村	台地 44・30	山林 寺院	150×120	全城	郭 穂曲輪 土塁	戦国	
15	八田砦跡Ⅳ	八田字新堀2090他 武射郡八田村	台地 30・20	山林 神社	220×100	3/4	郭 穂曲輪 穂切 上塁 虎口	戦国	
16	八田砦跡Ⅴ	八田字西谷1750他 武射郡八田村	台地 30・20	山林	200×100		明確な遺構なし	戦国	新堀
17	早船城の内城跡	早船 武射郡早船村	台地 50・40	山林	300×160	消滅	不明	中世	城の内 不動台
18	富田城跡	富田 武射郡富田村	台地 50・40	畠	450×250	全城	郭 穂曲輪 空堀 土塁	戦国後期	大城門 宮城 城之口
19	津波城跡	津波 武射郡津波村	台地 49・38	山林 宅地	500×450	全城	郭 穂曲輪 穂切 土塁 土橋 虎口	戦国後期	妻客 城山 根 古屋
20	草横地館跡	上横地 武射郡上横地村	平地村 7・1	山林 寺院	80×80	3/4	郭 水堀 土塁	戦国	城口 堀の後
21	上横地館跡	上横地 武射郡上横地村	平地村 7・1	畠 宅地・神社	80×80	3/4	郭 水堀	中世	城之内 妙見 不動田

※『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ -印上総・安房国地域-』 千葉県教育委員会 平成8年より転載

い平坦面が存在する。この平坦面中央やや南寄りに現在でも稻荷神社の小さな祠が祭られている。参道に沿って両側に土手が確認できるが、参道を整備する際に道路両側に盛ったものと思われる。全体としては土壘、郭、腰曲輪、土橋、橹台、虎口などの明瞭な城としての遺構は確認できない。

金尾城跡本城は金尾字源郷789ほかに所在する。伝承では後北条氏末期（1530）のものといわれ城主は本城因幡守であるが定かではない。城跡一帯は現在山林・荒地となっている。主郭となる台地端には神社が祀られ、舟形と思われる遺構は神社の参道とも思われるが、主郭部は遺存状態が不良である。本城、戸根、野中台、館上の地名が残る。

金尾集落の中に弘安7年（1284）千葉刑部大夫胤教の息女法阿尼が浄土宗の然阿上人を招いて創建したと伝えられる浄土宗の古刹金照寺がある。当時成東千葉氏は木戸川流域の金尾・古和方面まで所領していたことが考えられる。法阿尼没後金照寺住職は成東千葉氏の縁者によって繼承され、永享年間（1492～67）の時代に千葉氏の家臣である高宮中務大輔信高（常光）の外護寺となつた。以後家督を相続して天文年間（1532～54）左衛門尉貞常の時代には成東千葉氏の旗下に属したとされる。

周辺の同時期の遺跡に目を転じてみると、まず木戸川の対岸には蕪木城跡がある。県道八街横芝線が城跡を南北に分断するように通っている。標高30mから40mの丘陵上に展開する城跡である。弘安年間（1278～1287）の千葉氏に使えた武将といわれる蕪木常泰の居館に始まるといわれ、天正18年豊臣秀吉の小田原城攻め時の『関八州城之覚』に「蕪木駿河守三百騎」との記載があるように戦国末期に至るまで蕪木氏の名跡が継承されていたことが伺える。城域の中央部に当たる最上郭は方形館跡で、南側に音羽郭、北側に高砂郭が付属している。全体として中世前期の並列館城の典型と見ることができ、時代が下るにつれて防御性を重視した構造に変化している。昭和50年にはその一部が発掘調査されている。

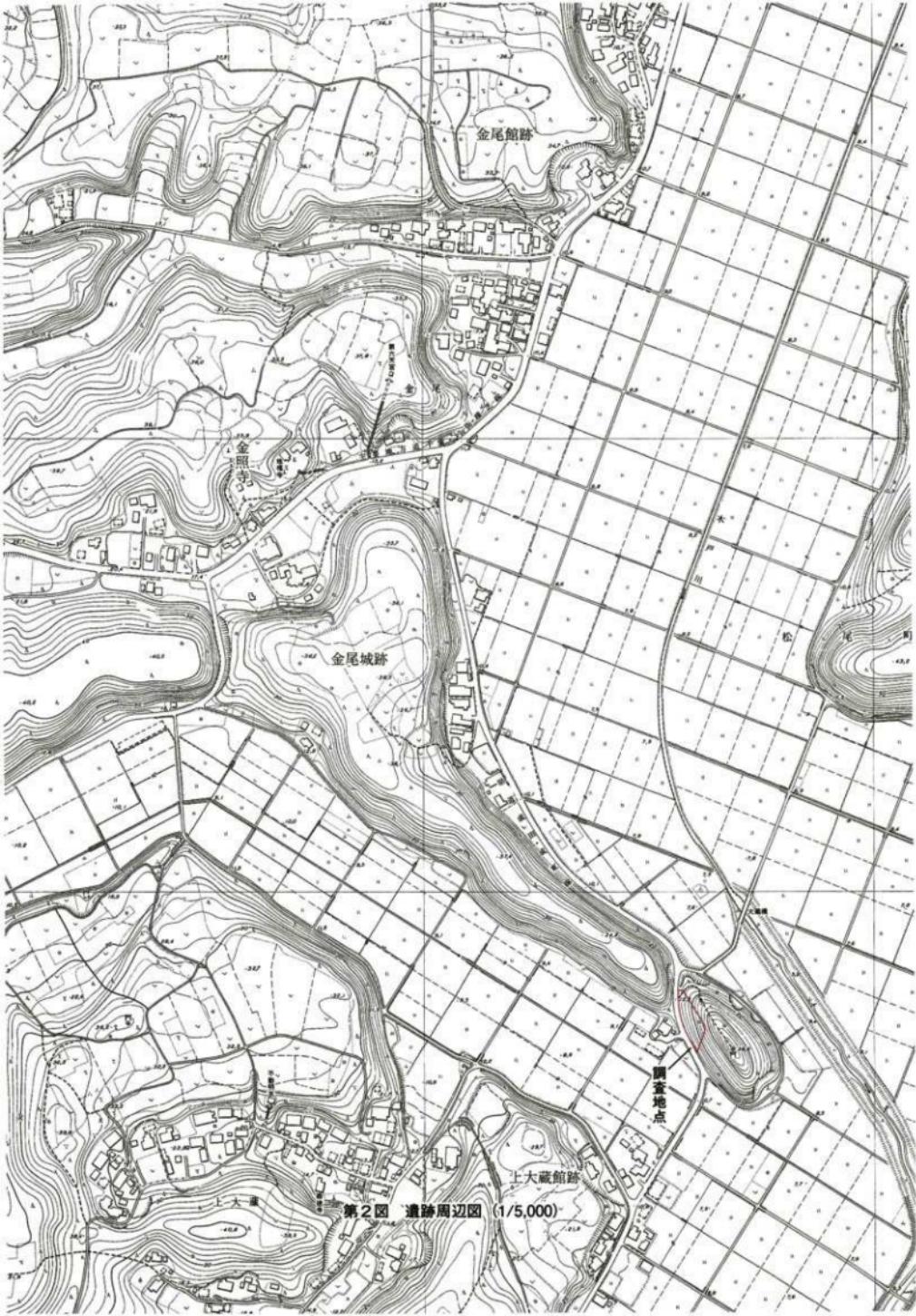
金尾城からさらに木戸川をさかのぼること約3.5kmに山室城跡がひかえている。この山室城跡は大きく4つの郭からなる大規模な城跡である。南北に延びる丘陵を利用し城域は東西約300m、南北約150mの範囲である。城域範囲外側には「字外郭」と「字物見台」の地名が残る。I郭は土壘と腰曲輪に囲まれ、西壁線には「出耕」と帶郭を配置する。II郭はI郭側に土壘の存在しないほか三方を土壘で囲んでいる。また、西壁線は二重に土手が設けられている。III郭はII郭を覆うようにL字型を呈している。外郭とは二重土壘により区画され、西端「出耕」状の張り出しを持ち対応する南端の虎口郭に呼応している。山室氏については『本土寺過去帳』や『千学集抜粹』、『上杉家文書』などにその名をとどめているが、15世紀以降発展した在地の新興国人層と考えられる。当城主の山室氏は天文元年（1532）に堅固な城を目指して山室城から飯櫃城に移ったとされる（『總州山室譜伝記』）。山室城跡は平成3年には急傾斜地対策の一環として、その一部の発掘調査を実施している。

そのほか、第1表のように木戸川流域や栗山川流域、九十九里沿いに多くの館跡、城跡が点在する。

中世関連の遺物資料に目を向けてみると、小川地区の妙見社板碑は「貞和2年（1364）」銘が陰刻された緑泥片岩製の武藏型板碑で松尾町内最古のものである。また古和地区的「虚空藏山」からは7点の板碑が出土しているが、その一つには応安6年（1373）の銘が刻まれている。

参考文献

- 1 「松尾町の歴史 上巻」 昭和59年 松尾町
- 2 井上哲朗『松尾町山室城跡』 1992 財団法人千葉県文化財センター
- 3 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ -旧上総・安房国地域-』 平成8年4月 千葉県教育委員会



第2図 遺跡周辺図 (1/5,000)

II 調査成果

1 遺構（第3図、図版2、3）

今回の調査範囲は、金尾城跡本体ではなく、台地先端にあたる島状の地形で、調査前に元の道路上に腰曲輪的な等高線に沿った帯状の平坦面を確認していたので、この地形に合わせた形でトレンチ調査（確認調査）を実施した。

第1トレンチは標高21mあまりを基準とする幅4m、長さ37mの帯状の平坦面に直交するような形で設定した幅2m、長さ7mのものである。第2トレンチはこれとはほぼ直交するように、すなわち帯状の平坦面に沿って幅2m、長さ17mに設定した。第3トレンチは第1トレンチから北およそ19m、標高は18mあまりの地点に幅2m、長さ11mで設定した。第3トレンチの土層観察では10cmほどの厚さの腐植土層下に、同じく10cmほどで褐色土が堆積し、その下は青灰色の砂層（地山）となる。すなわち地山を削平した痕跡を残す。しかしいずれのトレンチでも溝、土坑、硬化面等の遺構は検出されなかったので、確認調査で終了した。

2 遺物（図版4）

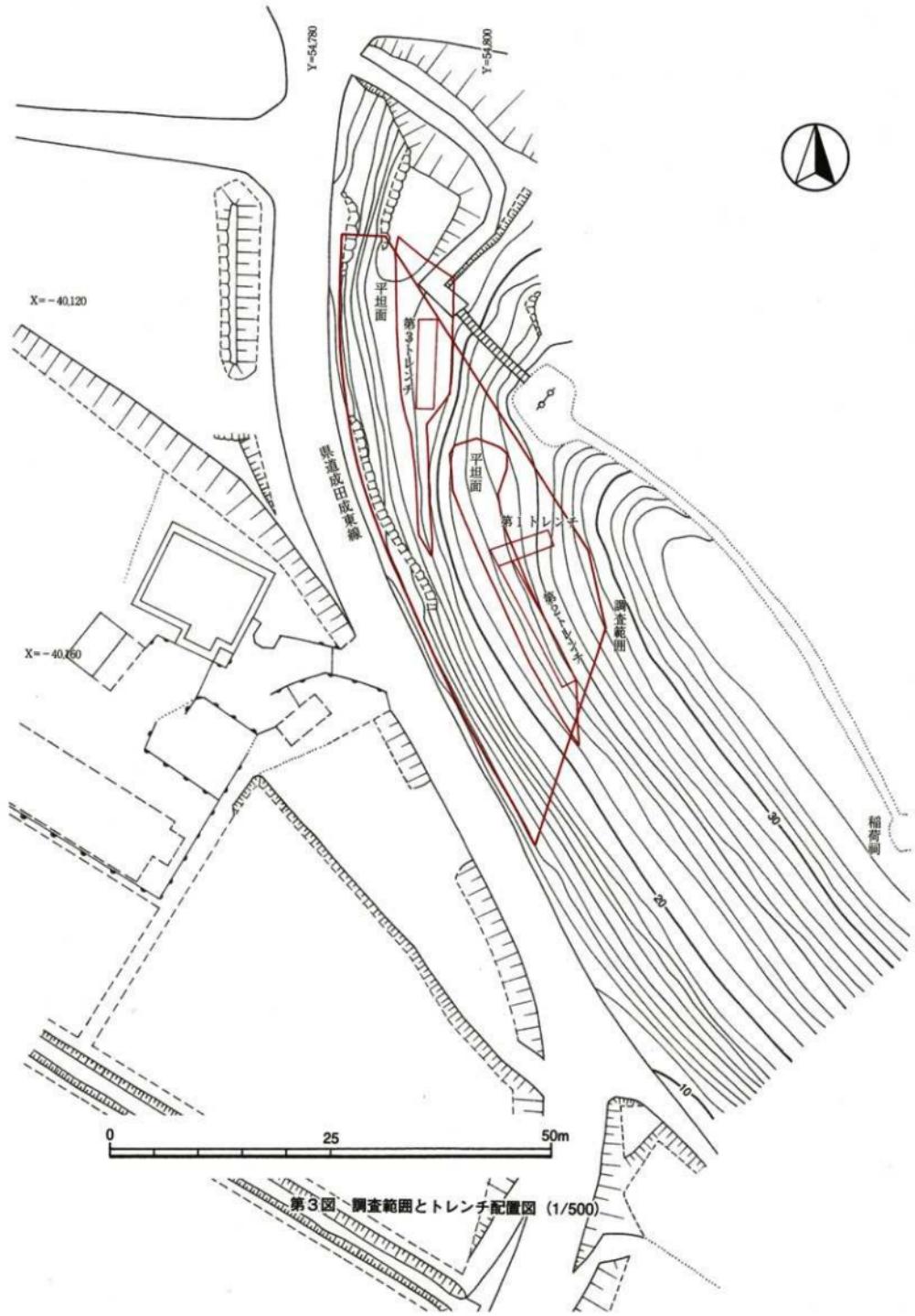
確認調査の結果、計6点の遺物が出土した。

第2トレンチからは、土師器甕と考えられる小片が2点（1、4）出土したが、極小のため実測はできなかった。その他調査中に内耳土器（焰烙）底部片2点（5、6）、土師器杯体部片1点（2）、甕頸部片1点（3）出土した。いずれも小破片で実測することはできなかったので、すべて写真資料としてのみ紹介する。

III まとめ

先述したように今回調査した金尾城跡の一部は、木戸川を東に望む標高38mあまりの舌状台地先端に位置し、しかも、独立した島状の丘陵である。この地点は近年開削されたものではなく、明治の迅速図にもすでに独立した丘陵として記されているように自然地形と考えられる。位置的には木戸川およびその支流が合流する地点で、谷津が台地奥へと深く入り込む侵入口にあたる。また、南方向に目を向けると木戸川下流と九十九里平野を望むことも可能な戦略的に要衝の地である。頂上に立てばほぼ360度の視界が開ける。性格的には物見台的なものであったことが考えられる。

今回の調査は工事において削平を受けると見られるのり面の一部調査ということもあって、城跡を特定できるような遺構は検出されなかった。2条の腰曲輪的な帯状の平坦面についても、腰曲輪と断定するに至らなかった。遺物についても中世から近世の遺物としては内耳土器（焰烙）の底部片が2点出土したにすぎない。ただ、いわゆる斜面においてこのような遺物を検出したことは、上位の平坦面上に、歴史時代の遺構や中世以降の遺構が存在することが想定できるのではないだろうか。



遺跡周辺航空写真 (1/10,000)





遺跡遠景
(北から)



調査地点
(北西から)



調査地点から
本城方面を望む



第1トレンチ
(東から)



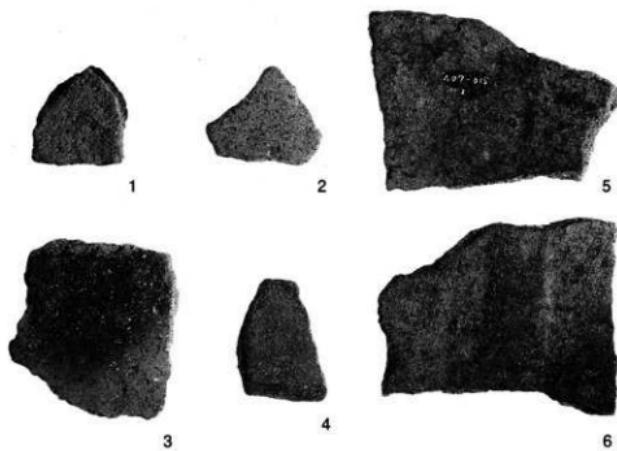
第2トレンチ
(南から)



第3トレンチ
(南から)



調査作業



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まつおまちかんのうじょうあと						
書名	松尾町金尾城跡						
副書名	一般県道成田成東線地方道路交付金埋蔵文化財調査報告書						
卷次							
シリーズ名	千葉県教育振興財团調査報告						
シリーズ番号	第553集						
編著者名	鳴田浩司						
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財團						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043(422)8811						
発行年月日	西暦 2006年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村、遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
金尾城跡	千葉県山武郡松尾町 金尾字福荷鼻102-112 か	407 015	35度 38分 13秒	140度 26分 18秒	20030108~ 20030120	900 m ²	緊急地方道路整備 事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
金尾城跡	城跡	奈良・平安時代 中・近世	なし なし	土師器片 内耳土器片			

千葉県教育振興財團調査報告第553集

松尾町金尾城跡

—一般県道成田成東線地方道路交付金埋蔵文化財調査報告書—

平成18年3月24日発行

編集 財団法人 千葉県教育振興財團

発行 千葉県山武地域整備センター

東金市東新宿17-6

財団法人 千葉県教育振興財團

四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社エリート情報社〔印刷出版局〕

成田市東和町415-10